**憲法９条と在日米軍基地の関係を改めて考える**

**～対米従属の観点から～**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2019年2月19日

　　　　　　　　　　　　　　　　　京都精華大学人文学部専任講師　白　井　　聡　氏

◆立石

お待たせしました。時間になりましたので、まだまだこれからいらっしゃる方も多いと思いますが、始めさせていただきます。憲法委員会の委員長の立石と申します。よろしくお願いします。埼玉弁護士会の憲法委員会は、２００５年に設置されました。当時、改憲問題がくすぶりはじめたときで、それに対処するということで設置されましたが、その後、憲法改正問題については、自民党が２０１２年４月２８日に「改正草案」を発表するなど情勢が緊迫化してきました。そういう状況に対応する専門委員会を埼玉もつくるということになって、２０１３年ころには埼玉弁護士会に会長を本部長とする憲法改正問題対策本部ができました。そういった関係で、現在の憲法委員会は、主に日本国憲法の理念と諸価値を会員や広く市民の方々に訴えていくことを任務とするようになりました。その関係で、本日は白井聡先生をお招きして、改めて、憲法９条と在日米軍基地の関係を対米従属の観点から考える企画を立て、この学習会を開催することになりました。

では、開催にあたりまして、今年度当会会長の島田弁護士より挨拶をお願いします。

◆島田

皆さん、こんばんは。きょうは大変お忙しい中、憲法委員会主催の学習会にご参加いただきまして、大変ありがとうございます。埼玉弁護士会では、昨年１０月２日の臨時総会におきまして、自衛隊を憲法に明記する改正案について反対であるという決議を採択しました。その中でも、議論に一番多くなりましたのは、自民党が出している改憲のたたき台ですけれども、それについては９条１項２項の規定にかかわらず、国の独立や平和を保つために自衛の措置をとることを妨げずと、そして、その実力組織として内閣総理大臣を最高指揮者とする自衛隊を保持するという、そういった条文があるわけでございます。この自衛の措置をとることを妨げずということで、特に限定がついておりませんので、いわゆる個別的自衛権だけではなくて、集団的自衛権の行使についても許容されるというふうに解釈をされる規定でございますので、これがそのまま実行されますと、憲法９条２項は空文化、あるいは死文化するということで、絶対反対であるというかたちの決議をいただいたわけでございます。そういった決議を得たあとも、実は、例えば沖縄では辺野古の基地がまた埋め立てが始まり、建設をされようとしているということがございます。最近では安倍さんにトランプ大統領からノーベル平和賞に推薦をしてほしいという話があったということで、どうも話を聞いてみますと、本当に安倍さんは推薦をしたみたいな感じがするわけですけれども、対米従属という言葉がきょうのお話のキーワードになるかもしれませんが、こういった状態がかなり極まっているという、そういった状態が今あるかなというふうに思っております。きょうは白井先生をお招きいたしまして、「憲法９条と在日米軍基地の関係を改めて考える、対米従属の観点から」というふうに題しまして、お話しをいただきます。この辺の対米従属という問題がどうして継続されてきたのか、今現状はどうなっているのか、そんなお話しをきょうはたっぷりと先生にお話しいただけるのではないかというように思います。きょう、白井先生のファンだという方も何人かいらっしゃっております。ぜひ楽しみに最後までご静聴いただきたいと思います。どうぞよろしくお願いをいたします。

◆立石

さて、本日の講師である白井聡先生は、京都精華大学で教鞭をとられていらっしゃる気鋭の政治学者です。今日は京都から、この学習会のためだけに来ていただきましたので、ご静聴のほどをよろしくお願いします。これから、１時間半ほど白井先生にご講演いただき、その後30分ほど質疑応答と考えています。それでは、よろしくお願いいたします。

◆白井聡

皆さん、こんばんは。本日はお招きをいただきましてありがとうございます。憲法９条と在日米軍の関係を改めて考えると、対米従属の観点からということで、本日は１時間半ばかりお付き合いを願いたいと思います。それで、早速、内容に入っていこうかと思いますけれども、簡単に経歴だけご紹介をしておきますと、今は私、京都にいますけれども、元々こちら、東京や神奈川に生まれて生活していました。大学は早稲田、それから一橋の大学院を出まして、現在に至るわけなんですが、元々私は政治思想史をメインの専門にしてまして、とりわけアカデミックキャリアとして最初に取り組んでいたのはレーニンの研究だったんですね。基本的に思想史の研究っていうのは非常に地道なものでして、要するに、昔の人が書いたものをああでもないこうでもないという具合にやっていくのです。ところが、今こうして、いわゆる現実政治というか、生ものとしての政治ということにいろいろ直接的な発言をしたり、若干の関わりを持つような日が来るとは私自身も全く予想してなかったことなんです。そのきっかけとなったのが、やはり２０１１年の3.11でした。それをきっかけにして、『永続敗戦論』という本を２０１３年に書きました。それ以来、現代政治、日本政治とか、あるいは、現代日本史ですね、近現代の日本史に関わる仕事なんかをいろいろやるようになって、今日に至るわけです。

では、その3.11をきっかけになぜそういう仕事へと展開していくことになったかというと、あの大地震と原発事故が起きた当時、私は神奈川県の川崎市に住んでおりましたけれども、身近と言っていい距離でああいった原子力過酷事故が起きるなんていうことは、当然全く初めての経験をしていたわけです。ところが、全く初めての経験をしているにもかかわらず、これは見たことあるぞと思ったんですね。既視感です。それは何かというと、「あの戦争の時の日本」ですね。もちろんそれは二次情報を通じて知っているにすぎないわけですが、でもこれそっくりじゃないかと。本来責任がある人たちの、この人たちは本当に自分たちが当事者だと思ってるんだろうかというような振る舞い。そして、一番ややこしいこと、一番大変なことは全部現場に押しつけるわけですね。とてつもない結果が出てきたわけですけれども、そして、そのとてつもなさは、いまだにどのぐらいとてつもないのかよくわからないわけでありますけれども、これについて責任追及というのはほとんどされていないに等しいわけですよね。要するに、あの事故を起こしたというかどで牢屋にぶち込まれた人間っていうのはいまだいないわけであります。恥ずかしながら、あの事故が起こるまで、原発に関して、漠然たる嫌悪感程度のものは持ってましたけれども、よく考えたことはありませんでした。

なので、ショックを受けて、これはどういうことなんだということで、自分なりにちょっと勉強をしてみたわけですけれども、そこからすぐにわかったことは何かというと、要するに、原発の推進、原子力の推進ということにおきましては、もう民主主義なんてものはかけらも無かったっていうことです。むき出しの国家主義があっただけだと。もう国策として、がんとこれを決めたんだとなったら、もうあとは、一方では甘言、カネをあげるよとか、取り立ててあげるよというかたちでアメをやる。で、それで言うことを聞かないと、おまえどういうことになるかわかってんのかということで、ムチでひっぱたくと。そういった根本的な構造に対して、「これはおかしいじゃないかと。事故が一朝もし起きたら、誰が被害に遭うのか。立地自治体の住民こそが被害に遭うじゃないか。ならば当然、立地自治体は原発についてどうやっていくのかということについてもっと発言権があってしかるべきではないか」というような全くの正論を述べた人物、例えば福島県の佐藤栄作元知事ですね、こういう方は国策捜査でもって牢屋にぶち込まれると、こういうことですよね。

それで、なるほどと思いました。この事故が起こる前から、この国は随分何かおかしなことになってるんじゃないかなというのはいろいろ感じてましたけれども、あの事故でもって、感じる危機感が根本的に変わったのです。要するに、それまでは、まあいろいろ悪い部分やまずいことはあっても、この国というのはまあそこそこなんとかなってるんではないか、という一種の信頼感、それは言い換えれば、日本社会のエリートに対する一種の信頼感があったということです。たとえば東京電力であれ、あるいは、経済産業省であれ、この国で最も優れた人材が行く組織だと言われていたわけですよね。だから、いろいろ問題が無いわけじゃないが、この人たちに任せておけばそうおかしなことにはならないんじゃないかと、3.11までは僕自身も事実上そう考えていたということですね、突き詰めなかったけれども。けれども、3.11が明らかにしたことはなんであるかというと、要するに、この人たちに任せれば大丈夫だとそう思われていた人たちは、実は全くのスカスカだったっていうことですよね。

一番ショッキングだったのは、事故発生の数か月あとに、現場の福島第一原発と東京電力の幹部のテレビ会議の模様が公開されました。そこで当時の吉田所長が、「もう水がございません」と、「もう水の蓄えが無くなりましたから、これは海水をぶち込むしかありません」と言う。それに対して東京の本社の連中、幹部がなんて答えたかというと、「ちょっと待ってくんねえかな」と言うわけですよね。「待ってくんねえかな」というのは何かというと、要するに、塩水を入れちゃったら、原子炉、そのプラントがもう二度と使えなくなってお釈迦になってしまうと。このことを恐れてるわけなんですよね。

だけど、これはもう何重にも間違っている。まず、すでにもうそのときにはメルトダウンが進行していたわけですから、二度とその原子炉は使えなくなるんじゃないかなっていうことを心配する必要はすでにないわけですね。

そして、より本質的な次元としては、要するに、あの事故、こうやって首都圏ではこういうふうに夕方に講演会をやって集まることができるような日常生活が続いてるわけですけれども、これは全く運がよかっただけの話であって、もうちょっと運が悪ければ、こういった日常生活っていうのはもう飛んでいたわけですよね。当時、政権、政府も最悪の事態を想定して、これは東日本全部駄目になるかもしれないと考えていた。まあ東日本全部駄目になるっていうのは日本終了ということだと思いますけれども、実際そういった可能性というのはあったわけで、それが避けられたのは誠に幸運だった。そういう局面に私たちはいた。

現場としてはもちろんそのことをよくわかってますから、「とにかく水入れなきゃと、何がなんでも水入れなきゃ」と言っている。それに対して、東電の幹部は、「ちょっと待ってくんねえかな」と言っている。要するに、この東電本社の幹部、エリートたちの頭の中がどうなっていたのかというと、原子炉がお釈迦になれば数百億円という損害が東京電力という企業に発生しますね。その一方で、これ下手を打つとどうしようもなくなってきて、もうみんな総員撤退するしかなくなって、日本終了になるかもしれないと。日本終了になるということと、東京電力が何百億円か損をするっていうこと、この二つを天秤にかけて、どっちが重いんだかわからないと。こういう人間がこの国ではエリートだというふうに目されていて、黒塗りの運転手付きのリムジンかなんかを乗り回して、人を顎でこき使ってると。それがこの国の姿なんだっていうことが、3.11が明らかにした最も僕は重要な事柄だったんではないかなと思いますね。

なんでこんなおかしなことになっちゃってんだろうなと。何が戦後民主主義だと。原発の推進ということにおいては、もう戦前戦中さながらの超国家主義の論理でもってずっとやってきてるじゃないかと。こういったことに気付かされて、なんでこんなおかしなことになってんのか、その原因っていうのをさかのぼって考えていくと、非常に古い話をするようだけれども、あの戦争という問題に行き着くと。あの戦争に負けた、悲惨な敗北に終わり、そして、その反省、後悔に基づいて、戦後日本は、民主主義と、そして、平和主義というものを大事にしてきたというストーリーが繰り返し言われてきたわけですね。戦後日本人は、口を開けば、「戦後日本はあの戦争への後悔と反省に立って云々」というようなことを、いろんな場面でいろんな立場で、国家的な立場も含めて、何百回、何千回、何万回と口にしたり、あるいは、書いてきたはずです。だけれども、残念ながら、全くそれは口先の、言葉だけのことにすぎなかったということが、明らかになってしまったんだと私は思います。主観的には反省を尽くしたつもりかもしれないけれども、社会全体として見た場合に、実は反省もしてなければ後悔もしていない。

丸山眞男はかつての日本のファシズムのシステムを「無責任の体系」というふうに呼びましたけれども、もう原発推進のシステムなんて「無責任の体系」そのものなわけですね。もし本当に反省、後悔してるんだったら、その「無責任の体系」みたいな病理、人食いマシンのような構造、これを私たちの社会は克服していなければおかしいわけです。ところが、それは克服されていないどころか、原発のようなとても重要なところで、その人食いマシンは動き続けてたんだということが明らかになった。

で、思ったわけです。「なんでこんなに反省、後悔しないで済むんだろうか」と。そのときに、ふっとわかったわけです。「そうか、負けたと思ってないからだな」っていうことですね。負けたと思ってない。私はそのことを「敗戦の否認」と呼んでますけれども、「否認」とは何かというと、元々はフロイトの精神分析学に由来する用語でありますが、「知識として知っているけれども現実として認めていない」という、そういう精神状態を指しますね。もっとわかりやすく言うと、「都合の悪いことは見なかったことにする」という心理でありまして、これは、ある意味とてもありふれた心理でもあるわけです。私たちが日常生活の中でよくやることでもあるのですが、小さなことを「嫌だから、見なかったことにしちゃえ」とやっても大したことはないけれども、大きなことについてそれをやるようになると、これは病気だと、心の病だということになります。だから、日本人の国民的な歴史意識は病的だということです。

「敗戦の否認」という歴史意識が最もわかりやすく表れているのは、８月１５日をどう呼んでるかということだと思うんです。「終戦の日」とか「終戦記念日」と呼ばれていますね。「終戦」ってなんだよってことですね。戦争が自然に終わりますかと。自然には終わらないわけであって、大日本帝国がポツダム宣言受諾をして、敗北を認めて終わったわけであって、本来、「敗戦の日」であるはずが、しかしながら、「終戦」という言葉が定着してしまっている。要するに、負けがごまかされてるっていうことですね。あの戦争について、あれは日本が勝ったのか負けたのかといったら、それは負けたに決まってる、決して勝ったのではないっていうことはみんな知識として知っているけれども、じゃああのような大戦争に負けるというのは巨大な意味を持つわけだけれども、それがどんな意味であるのかということを知らないし、知ろうとしないし、あるいは、さらには、「知らなきゃいけないんじゃないですか」って言われると、「うるせえ、ばか野郎」というふうにぶち切れる、逆ギレをしてしまう、こういう歴史意識を持っていると思いますね。

だから、例えば、今、北方領土交渉において、ロシアのラブロフ外相にそこのところを散々つつかれてますよね。「《北方領土》なんていう言葉を使ってること自体がおかしい」というふうにラブロフは言ってるわけですけれども、日本の一般的な世論としては、「不当占拠しておいてなんだ」と、こういう反発になるでしょう。けれども、確かにあの戦争末期においてソビエトがやったことで道理に反することは多々あるわけですが、しかし、今回の安倍・プーチン交渉は１９５６年の日ソ共同宣言をベースにしてやると言っている。じゃあ日ソ共同宣言の内容ってどういうものなんですかと読んでみると、要するに、これは、「あの戦争の結果として生じた状況、現状に対し、ああだこうだと文句を言わない」と、平たく言うとそういう内容が書いてあるわけですよね。だから、不法占拠だとか言えないっていうことなんですよね。それで、平和条約を締結すれば、小さな２島は返してやろうと、こういう内容になっているわけです。したがって、今、ラブロフさんが言ってるところの、「北方領土という言葉遣いを日本がすること自体が間違っとる」というのは、安倍・プーチンが日ソ共同宣言ベースでいきますと言ってることに対して、全然これは反していないんですよね。ところが、大方の日本人は「露助の奴、ひでえことを言いやがる」というふうに幼児的に反発するだけである。北方領土問題というのは、煎じ詰めれば、負け戦の処理の問題だということが全然わかってないからですよね。結局、あの戦争勝ったんじゃなくて負けたんだということがよくわかってないから、いつまでたってもそういう幼児的なことを言ってるわけです。

だから、永続敗戦というのはどういうことなのかといえば、負けたってことをちゃんと認めてないことを指します。認めてないが故に、その負けをもたらしてしまったシステムを乗り越えられない。それが温存されてしまう。なので、それは当然また新たな敗北を呼び込むことになる。故に、ずるずるだらだらと負け続ける。これすなわち、永続敗戦っていうことですね。

よく戦後のドイツの歩みと日本の歩みが対比的に言われますけれども、ドイツの場合は、もう東西分断されちゃったっていうこともありますし、もう「負けました。完全に負けましたと。私たちが悪うございました」というふうに、もう徹底的に敗戦を認めるしかなかったわけですね。それに比べますと、日本は、冷戦構造の中で、植民地こそ失いますけれども、沖縄という例外を除いて（小笠原もありますけれども）、いわゆる分断統治ということにはならず、そして、東西対立の中で、アメリカとしてはアジアの一番大事な同盟国だという位置付けになりましたから、アメリカとしては日本をいわば保護してやる必要というのがあったわけなんで、これでもって、非常に日本は恵まれた環境に置かれた。恵まれたというのは、それによって経済発展を大いにすることができたということだけじゃなくて、要するに、あの戦争には負けたんだと、そして、あんな大戦争に負けるっていうことにはどんな意味があるのか、何をもたらすのか、そのことについて真剣に考える必要がなかったということですね。

そういう意味で、戦後日本っていうのはあまりにも幸せすぎたんだろうと思います。いろいろ都合がよすぎた。だいたい物事はどこかでバランスが取れるようになってるんだなと、私は最近つくづく思います。それだけ幸せすぎたということが、どういうつけとして表れているかというと、いってみれば、この国が今どんどん落っこちていってるわけですけれども、まさにそれが底なし沼のように落っこちていってるんだと思います。アメリカの一の子分になったと、あとでより詳しく説明しますけれども、非常に独特なかたちで一の子分になったわけです。だけれども、それじゃあアメリカが自由主義陣営の親分として、実際、力を行使して、血を流して戦うこともあったわけですけれども、それにくっついていって、自分も血を流して一緒に戦う必要はなかったわけですよね。いわゆる平和主義、戦後平和主義、そして、憲法９条という絶好の切り札によって、アメリカに対して、日本の親米保守派としては、「お手伝いしたいのはやまやまなんですけれども、憲法上のいろいろ制約っていうのがありましてですね」というかたちでお断りすることができた。お隣の韓国はどうだったでしょうか。ベトナム戦争の時、韓国はベトナムに派兵をせざるを得なくなるわけですね。日本はしなくていい。しなくていいどころか、ベトナム戦争で経済的にはめちゃくちゃもうけるわけです。血は流さないでカネはもうける、こういう具合ですね。これ、やっぱりある意味、都合がよすぎるっていうことだと思うんですよね。もし日本に平和憲法のようなものが無くて、ベトナム戦争の時に、「おい、おまえ手伝え、親分がこんなに苦しんでいるんだ、子分としては助けるのが当たり前だろう」と言われて、日本も派兵をしなければならなかったとしたら、当然それは日本人にとってもベトナム人にとっても、大変大きな傷跡を残すことになったでしょう。それは大変な悲劇と言うべきです。しかしながら、ということですね、もしそういう経験を日本がしていたならば、今ここまでひどい国にはたぶんなってないだろうと思います。

要するに、どっかでバランスが取れるようになってるんですね。幸せすぎたということが、今これほどまでに奇形的な社会っていうものが生まれてしまうっていうことにつながる。この『永続敗戦論』が出たのが２０１３年３月、書いていたのが２０１２年の１２月ぐらいですね。ちょうどその頃、総選挙があって、安倍自民党が勝利をして、現在にまで続く安倍政権が成立をするわけなんですけれども、私はそれを横目に見ながら原稿を書いていて思ったものです。「これはもう最低最悪の政権ができて、最低最悪の政治が行われるであろう」と。なぜなのかといえば、それはそれこそ、この『永続敗戦論』でテーマとしているところの「敗戦の否認」というエートス、これが言ってみれば肥大化して物質化して、服を着て歩いてるようなのが安倍さんですから。要するに、戦後日本の悪いところを全部集めたような、そういう集めて煮詰めたようなひどい政権ができるということを確信しておりました。現実にその通りになっていったわけであります。だから、『永続敗戦論』１冊だけで、安倍政権とはなんたるかっていうことは全部ご了解していただけると、そういう本になっています。しかし、そういう私にとっても、想定外だったのは、この最悪な政権がこんなに長く続いてるということですね。だから、もう問題は安倍政権じゃないのですね。安倍政権が問題なのではなくて、日本国民が問題であると。日本国民の堕落が問題である。安倍さんのいろんな言動を見聞きしていると、なるほどなと思いますよ。ある意味、正しく今の日本人を代表してますよね。

彼が言った名言の一つに、「経済政策っていうのはやってる感が大事だ」と。「アベノミクスは成功してるんですか、どうなんですか」と聞かれて、「やってる感が大事だ。だから、本当はうまくいってるとかうまくいってないとか、そんなことはどうでもよろしい」と言ったっていうんですが、なるほどなと。

安倍政権下の日本で起こったいろんなことっていうのを見てると、もう「やってる感」ばっかりじゃないですか。ＳＴＡＰ細胞事件なんてありましたね。あの小保方さんという方は、残念ながら、もうティーンの頃からやってる感だけでのし上がっちゃった。そのやってる感を演出するということに長けていて、それでちやほやされて、あの人の場合、それで自分は本当にやってるんだという気持ちになってしまったということで、ここまでくると病気ですね。病気じゃないケースを挙げてみると、例えばショーンＫという方がいましたね。この人も、要するに、なんかよくわからないけれどアメリカ帰りですごいらしいと。まあそれでテレビ朝日の看板番組のレギュラーコメンテーターまでいっちゃうわけです。

それから、教育現場なんか見てても、教育現場の疲弊ということが、もう初等教育でも中等教育でも、私が従事しているところの高等教育でも言われますけれども、なんでそんなに疲弊してるのかというと、要するに、仕事のための書類を書くことが仕事そのものと入れ替わってしまっているということですよね。たとえば、大学だったら「外部研究資金を取ってこい、それがその研究者の評価になるんだ」と。それで、じゃあ外部研究資金取るにはどうしたらいいんですかっていうと、研究計画書みたいなのを書くわけですね。でも、研究計画書なんて、あんなものはいい加減なものなんですね。それはそうなんですよ。「何が明らかになるのかを詳細に書きなさい」って書いてあるんですけれども、それは研究してみないとわからないんですから、それがわからないから研究するんであって、最初から何が明らかになるのか、そんなに長々と書けるほどはっきりしてるんだったら、最初からやる必要はないんですね。だから、なんかよくわからないもっともらしいことをずらずらと書いて、でっち上げることになるわけなんですけれども、こういった作業というのはいたずらに人を疲弊させ、そして、非常に時間がかかるんです。幸い僕のやってる研究っていうのは大してカネもかかりませんし、そういうことには全然時間を使わないようにしてやってますけれども、分野によっては悲惨なものだと思います。要するに、もう１年中、そういう実は内容空疎な書類を書くということが事実上の仕事になってしまう。だから、本当の意味での、たとえば実験をするとか、観察をするだとか、本当の意味での研究や教育っていうのは全然されないようになる。要するに、これはもう壮大なやってる感ごっこなんですよね。「あいつは熱心に書類を書いてる」となると、「あいつはなんか仕事をしているらしい」ということになるわけなんですよね。

それで、いざ研究資金がそれで取れちゃったりすると、これはまた大変ことになるんですね。大変なことになるっていうのは、「これもらったけどさ、これ使い切れねえじゃねえか」とかいう話になるわけですね。そこで、見てくれだけはすごいけど、実はやってる当人たちもなんのためにやっているのだかよくわからない国際シンポジウムなんかを開催したりする。まさにこれもやってる感ですね。

だから、かつてのソ連とか、あるいは、北朝鮮経済っていうのは長年低迷してるわけですけれども、こういったところを全然笑えない状況になってきたと思います。いわゆる計画経済がなぜうまくいかなかったのか。これは諸説ありますけれども、最も有力で、そして常識的な説というのは、結局、ノルマをみんなに課して、割り当てて、それで「ノルマを達成しなさい」というふうにやってもうまくいくもんじゃないと。どうしてかというと、みんな結局、そのノルマを達成してるふりをすればいいということになっちゃうから、結局、みんな働いてるような顔して実は働いてない。みんなで働いてるふりを見せつけ合うような、そういう社会になってしまう。これが、ソ連型社会主義の失敗が示した現実だと思いますけれども、今の日本はそれにそっくりですよね。なんでこんなにみんな長時間労働をやってるのというと、一人だけ先に帰ると、「あいつは働いてない」というふうに思われるからだと。この恐怖心で、みんな特に本当はすることがあるわけでもないのに、だらだらと残業をしている。当然、生産性は上がってない。なぜなら、だらだら働いてるだけだからっていうことで。これって、みんなで一生懸命働いてるふりをお互いに見せつけ合うという状況ですよね。

こういう具合に、もう「やってる感社会」になりました。だから、そういう意味で、安倍さんは時代精神を体現している大宰相である、と言わなければならないかもしれませんね。今の日本人にお似合いの総理だよねということである。だから、もう最近、私、安倍批判とかほとんど興味ないんです。もう飽きたし。『「戦後」の墓碑銘』などで、もう散々批判はしました。問題は、だから、安倍ではない。国民だと。安倍さんがこの日本を悪くしているということではないのですね。もう十分悪くなっていることの結果として、安倍政権みたいなものが出てきて、そして、それが長期政権化していると。安倍さんは原因ではなく結果であるっていうことが非常に重要なポイントなのではないかと思います。

では、なんでここまでひどくなってるのはなぜなんだろうということで、もうちょっと視野を広げて、日本の近代の全体から考えてみる必要があるんじゃないかということで書いたのが、昨年４月に出しました、この『国体論』という本であります。

「国体」って、もちろんこれは国民体育大会のことじゃなくて、あの国体、国体の本義の国体であります。国体とはつまりは天皇制のことだよねというふうに、通常、了解されてると思いますけれども、結局のところ、日本のこの対米従属の問題っていうのの根っこと言いましょうか、なんでこれがこんなおかしなことになってるのかということが、国体に関わっているのです。というのは、ある国家が対米従属していること自体はべつに不思議でもなんでもないわけですね。とりわけ日本の場合、アメリカと正面戦争をやって、それでやっつけられたと。「おまえ、思い知ったか、言うこと聞くよな」と。「へえ、すいません、言うこと聞きます」と。こういうことになったにすぎないわけですよね。アメリカが言うことを聞かない国に対してどういうことをするのかということ、どれだけ恐ろしい国なのかっていうのは、いろいろな事例で証明されています。だから、ある意味、属国化されてしまったということは、べつになんら不思議なことではないわけです。

ところが、日本のこの属国性というのは、私は非常に特殊なものだというふうに捉えています。それは、『永続敗戦論』の時から論点として若干出てたと思うんですけれども、要するに、私は対米従属そのものを批判してるのではない、そうじゃなくて、日本の対米従属の特殊性を批判しているのであると。その特殊性とは何かというと、従属の事実が否認されてるということですね。属国であるという事実が否認されている、あるいは、不可視化されている。たとえば、首都圏上空の横田空域の問題だって、いったいどのくらいの人がそのことを意識をしているでしょうか。首都圏の上空が外国の軍隊によって、いわば事実上、立ち入り禁止になってて、全部管制を預けさせられてなんていう異常な状態がある。ところが、その異常なことを、全然意識していない。世界中にアメリカに属国化させられている国はいくらでもあるわけですけれども、どの国だって、そして、どの国の国民でも、そのような状態に自分たちが置かれているということについてちゃんと自覚があるわけですよね。自分たちが制約を受けている、不自由な状態にあるということを、そのことを知っているはずです。時にそれは大変痛切な意識と共にそれを知っているはず。ところが、日本だけは全然そう思ってないという、そこが大変おかしな特徴だと思います。

この特殊性ってどこから来るんだろうなと考えていくと、結局、これは天皇制の問題というところに行き着くんだろうというふうに、私は思い至りました。『永続敗戦論』書いてるときに、すでにそういった発想というのは少し出てきてたんですけれども、『永続敗戦論』を書いたあとにいろんな方と話す機会があって、たとえば、新外交イニシアチブをやっている猿田佐世さんとか、あるいは、米軍基地の問題について、日米地位協定の問題について、素人であったが故に、素人の素朴な疑問から、「実はこんなことだったのか」ということで、次々にその実情を印象的に知らしめる仕事をやっております矢部宏治さんとか、こういった人たちと意見交換する機会を得るに至りましたけれども、そこからわかったのは、確信を深めたのは何かというと、やっぱりこれは天皇制の問題なのだ、ということです。要するに、アメリカが天皇化してるんだなっていうことですね。

なぜそう言えるのか。つづめていえば、戦前までのいわゆる天皇制国家の物語、原理と、戦後の対米従属体制というのは、どちらも、いわば温情主義的な妄想に媒介された従属を否認する従属なのです。と言いますのは、戦前の天皇制の場合、「天皇陛下の赤子」という言葉がありましたけれども、どういうイデオロギーだったかというと、日本人というのは一つの家族なんだという、家族国家論ですよね。日本人は一大家族なので、みんな自然と仲良くやってるんだと、むつみ合うようにできてるんだと。そして天皇の存在は、西洋の王様とか中国の皇帝とかとは一見似てるように見えるけども違うよと。なぜ違うかというと、結局、外国の王様は上から押さえつける、押さえつけて支配する、そういうトップだけれども、「日本の天皇というのはそういうトップじゃないんだ、お父さんなんだ」と。日本人あるいは日本民族という大きな家族のいわば家長だと、こういう考え方ですね。だから、お父さんのようにみんなを温かく、一視同仁でもって見守ってくれている存在であって、支配しているんじゃないと。だけども、このイデオロギーが大変欺瞞的なのは、いくらそういう美しい物語を作ったって、国家というものはあくまで国家であり、究極的には暴力装置を担保として支配する機関であってそのトップが天皇であるのに、そのことを否認している。支配の事実を否認している。だから、被治者の側はどうなるかというと、従属をしてるんだけれども、そのことを否認する。従属なんかしてないという理屈になる。

これが戦後のアメリカと日本の関係に、この天皇と臣民の関係がそこに投影されたということです。どういうことかというと、「アメリカは日本を愛してくれてるんだ」という妄想ですね。その証拠として最も見やすいのは、日米関係については日本政府が率先して異常に情緒的な言葉を使ってるわけですね。「思いやり予算」とか「トモダチ作戦」とかね。気持ち悪いわけですね。なんでこんな言葉遣いをするのか。これは要するに従属を否認したいからですね。属国であることを否認してるっていうことです。国と国との従属支配の関係というのは、基本的には非常にビジネスライクなもの、打算的なものですよね。親分は「こいつを子分にすると都合がいいから子分にする」ということだし、子分からすると、「こいつ親分だと言っておくと都合がいいから親分にしとこう」と。だから、利害関係の基礎が変われば、当然、その親分子分の関係は変わってくるわけですけれども、まさに友達とか思いやりとか言うことによって、「日米関係とはそういう関係ではございません」ということを言いたいわけですよね。「そういう打算的な関係に基づくんじゃなくて、あのひどい殺し合いのあとに奇跡的に芽生えた友情、敬愛、これに基づいてるんだ。だから、日米関係について支配とか従属とか、そういう変な言葉遣いをするもんじゃない、そんな力による支配とか、支配するとかされるとか、そういう冷たい関係じゃないんだよ」と。いってみれば、天皇に代わってアメリカが日本を愛してくれてるっていう物語に変わったんだろうと。

だから、政府の、特に外交や防衛の関係者や、あるいは政府寄りのシンクタンクなんかが出す白書だとか提言のペーパーには、どれを読んでも、とにかくまず、いの一番に「日米同盟は大事であると、我が国の基礎である。そして、日米同盟はさらに強化しなければならない」というようなことをもう何十年にわたって書き続けているわけですよね。どこまで強化すりゃ気が済むんだと。ある時、私はそれに気付いたんです。これはべつに何か具体的なことを言ってるわけじゃないんだな、と。祝詞みたいなもんだなと。要するに、千代に八千代にみたいな話だと。日米同盟よ永遠なれという話だなと。これはもう天壌無窮ということですよね。

こういう、日米同盟を永遠化するという発想は、比較的新しいものです。あの安倍さんのおじいさん、岸信介、この人なんかは、まさにこの対米従属レジームの基礎をつくった人ですけれども、その岸信介だって、防衛の方針を示した非常に簡潔な文書の中でどういうことを言ってるかというと、「日米安保体制があって米軍が日本に駐留しているのは、暫定的な状態である」ということを書いています。要するに、国連を中心とするところの世界的な安全保障体制というものができるまでのつなぎの措置として、今こういう状態にあるんだと、そういうふうに書いています。だから、まだまだ１９６０年ぐらいの段階におきましては、日米同盟なるものは、親米保守派においてすら、相対的なものだったわけですね。これが天壌無窮に続くものだなどというふうには認識されていなかったわけです。永遠化が露骨になっていくのは、私は中曽根あたりからかなと思います。そして、さらに、冷戦が終了して、東西対立が終わりました。そのとき本来、日米安保体制は最大の仮想敵を失ったわけですから、存在理由が無くなったということなんですが、存在理由が無くなってからこそ、まさにこれが永遠でなければならないという観念が非常に強くなってきた。これって天壌無窮ということで、もうこれは理屈じゃないんだってことですよね。これはまさに、戦前における国体イデオロギー、「日本国は開闢以来、天皇陛下が中心にいる国なんだ、それはずっとそうだったし、今日もそうだし、未来永劫そうだ」という観念にそっくりである。

そして、この観念が、家族国家論が奇妙なかたちで国際関係を通じて生き延びたことによって、いわばこの国は内側から腐ってきたと思います。先ほどから言ってるように、対米従属していること自体は、べつにこれは国際関係においては全くよくある話であって、なんら驚くに値しないことだけれども、日本の対米従属は、それがいわば天皇制という、土着思想なのかもしれませんけれども、それと結合することによって、この日本社会を内側から腐らせる作用というのを働かせてきたと思います。

どんなかたちで家族国家論が生き残っているのかを見なければなりません。この家族国家論というのが生き残ってしまったことが、今日の日本社会でものすごく強い悪影響を残してると思います。それは、たとえばどんなところへ表れているかというと、いまだに日本人は権利という言葉をわかってないですよね。今日は弁護士さんの方が多いということで、たぶんお仕事を進める中でさまざまな場面で実感をなさることではないかと思いますけれども、この社会には権利という観念は定着してないなというふうに思わされる場面が多いのではないでしょうか。利権はわかるんですけどね。利権はわかるんだけど、権利はわかんない。同様に、会社っていうのは、これは実感としてわかるんですが、社会って言われるとわかんねえと。これが、いわば日本の戦後民主主義社会、民主主義になったと言われる世の中の実情なんじゃないかと思います。それってなぜなんでしょうか。

家族国家論は、いわゆる万世一系イデオロギーと非常に密接に結びついてたわけですね。どうしてかというと、いわゆる国体イデオロギーによれば、日本というのは全くほかの国と違った、隔絶した、素晴らしい在り方をしてるんだと言ったわけですね。なんでそんなに素晴らしいのか。それは、天皇陛下が、天皇という存在がずっと変わらざるかたちで一度も王朝を交代することなく治めていらっしゃるんだと。天皇は民族の父であって、そして、その民族の父は神の子、神の子孫、あるいは、もう神そのものであるとされた。その神の子孫、ないし、神そのものであるところの人が、国民を我が子のように愛してくれてるんだと。「なんちゅうありがたい話や、日本人に生まれてよかったなあ」というのが、大日本帝国を支えた物語だったわけですね。そのときに、なんでじゃあ一度も変わりなく王朝が続いてるのかというと、それは天皇が、上から治める、上から力で治める君主じゃないからだという話につながるわけです。ヨーロッパなんか見てごらんなさいと、しょっちゅう王朝が交代したり、あるいは、もうフランスみたいに王朝いらないってことになってるだろうと。あれはなぜかというと、結局、他国の王様は上から治める王様だから、時にそれは民衆からの反発を食らって王朝が倒されたり、あるいは、王朝が廃止されたりすると。ところが、日本はそういうことは決して起こらないんだと。なぜかというと、みんな家族だからだと、日本人はみんな家族なので、争うことはたまにはあっても、自然と仲良くなるようになってるんで、したがって、君主も上から押さえつける必要はない。上から見守るというような在り方で天皇が君臨するということで、ずっとそれが続いてきたんだと。そういう理屈ですね。

この理屈は、西洋近代のスタンダードな理論、社会理論と真っ向から対立するわけです。たとえば、トマス・ホッブズの議論はそれのスタンダードなものだと思いますけれども、ホッブズによれば、人間の本性は、これはもう恐るべきエゴイストだとされています。自分の利益になると思ったらなんでもする。だます、盗む、殺す、なんでもするよと。そんな人間同士が集まったらどうなりますかっていったら、バトルロワイヤル状態になっちゃうわけだから、これは地獄ですね。ということで、人々はお互いのエゴイズムの一部を捨てるという約束をお互いに結んで、それで秩序をつくるんだと、これがホッブズの社会契約の議論の要諦ですよね。このホッブズ議論なんかに表れた社会イメージにおける人間というのは、エゴイストである、そして、その各人のエゴイズムというのは必然的に激しく衝突するものだということが前提にされているわけです。その衝突がどうしようもないところまでいくとみんな不幸になりますから、どっかでエゴイズムに線をひきましょうっていうことになるわけですね。つまり、ここまでは正当に主張し得るエゴイズムですね、ここから先は言い過ぎ、やり過ぎになりますよねというところで線を引く。そして、線を引いた上で、正当に主張できるエゴイズムのことを権利と呼ぶと。こういう論理構成になっているということですね。近代的な権利の概念は、基本的にこういった前提から生じていると思います。

そこへくると、この日本の国体イデオロギーは大きく違っている。元々日本人はみんな家族なんだとされている。家族が自然とみんな仲良くするもんだっていうのも大いなるフィクションなんですけどね。そのような間違った家族像を、さらに間違ったかたちで国家大に拡大するということをやるわけですね。みんな自然と仲良くなるようになってるのだから、時に争いがあっても、それはまあ日本人なので、エゴイズムが大したことがないので、自然と丸く収まるようになってる、というようなイデオロギーですね。このような前提を置くならば、確かに権利という観念は必要がありませんよね。そもそもエゴイズムがぶつかり合わないってことになってるわけですからね。

そういう社会像はおかしいよねという感覚が、敗戦のあと何十年かのあいだは、ある種、薬が効いて、権利という観念も大事なんだというような考え方がそれなりに根付いたかのように見えました。けれども、現在を見てみると、権利を剥奪されている人、不当にわずかしか認められていない人、そういう人たちが自分たちの権利をよこせというふうに声を上げるとき、この社会がどれだけ冷たい反応を示すかでしょうか。なんで権利主張に対してこの国はこんなに冷たいんだろう、この国の人は冷たいんだろうと考えてみると、そもそも権利の観念が無いからだと。それというのは、全員が潜在的に無権利状態にあるってことですよね。潜在的に無権利状態にみんながいる中で、「私にちゃんと権利をよこせ」と叫ぶ人がいるとどう見えるかというと、不当に特権を主張しているように見えちゃうわけですよね。なので、「あいつはわがままを言ってて怪しからん」ということで、みんなで袋だたきにすると、こういう社会になってしまった。

そういう傾向が特に安倍政権になったあたりから非常に強まっていると感じますね。さらに、安倍政権がここまでひどい政権であるにもかかわらず、結局、安倍しかいないからみたいな訳のわからない理由付けで続いてしまう状況があり、そして、さまざまな真っ当な批判に対して、「もううるさいよ」みたいな、非常にシニカルな態度でもってそれを潰す。こういう態度が蔓延していて、まさにそのような中で民主主義は死に絶えつつあります。民主主義のエートスがもう欠けてるわけですから、死に絶えつつある。

なぜここまで腐食してしまったのか。私は『国体論』の中で、ある聖書の中の言葉の解釈をしています。「主を畏るるは知恵の始まり」という、これは旧約聖書の中の言葉ですが、私はべつに特に神学とかに詳しいわけじゃなく、素人考えでありますが、解釈をしてみました。「主を畏るる」ということと「知恵の始まり」がどうして結びつくんだろうかと自分なりに考えてみると、こういうことじゃないか。大概、人間は自分のことを漠然と自由だと思ってるんですね。「俺はなんの制約も受けてない自由な存在だ」と思っている。ところが、実は全然そうじゃなかったと、絶対的な神の存在、主の存在に感づきますと、自分は自由だと思ってたのは全く単なる思い込みであって、指を１本上げ下げするのも実は主の意思であったっていうことに気付くんだと。そうなると、当然、自分の運命は主の意思次第ということになりますから、主は畏るべきものだっていうことになりますよね。だから畏るるっていうことになるわけですが、畏るるだけじゃなくて、じゃあ、いったい主は自分に何をやらせようとしてるんだと、主はいったい自分に何を望んでるのか、このことを是が非でも知りたいと思うわけですね。知らないわけにはゆかぬということになってくる。どうにかしてそれを知りたいと思うから、知性が運動を始めるんだと。だから、知恵の始まりとつながるということなんだろうと、私はそういうふうに解釈しました。

これは裏を返せばどういうことかというと、自分は漠然と自由だというふうに思い込んで、それにまどろんでいる限り、知恵は絶対に始まらないっていうことですよね。今、日本人が落ち込んでいる状態とは、まさにそのような状況だろうと思います。いわゆる反知性主義の跋扈が言われていますが、それは特殊な対米従属がもたらしたものだと言える。なぜなら、対米従属は否認され見えなくなっている。そんなことはべつに意識しないでもよろしいというか、ほとんどの人間がそんなこと全く何も考えずに生きている。つまり、漠然と自由だと思い込んでいる。不自由だ、制約を受けているということを自覚すれば、なんとかしてそこから抜け出したい、少しでも、相対的にではあれ自由を得たいというふうに思うわけであって、自由になりたいという意欲も生まれるし、じゃあそのためにはどうしたらいいんだという知恵も生まれてくる。けれども、支配されていることを否認して、漠然と自由だと思い込んでいる限り、自由への欲求も出てきようがなければ、知恵も始まりようがない。これがたぶん、今、日本人の落ち込んでいるところの精神状況だろうと。ことほどさように、本来単なる対外関係のことにすぎなかった事柄が、いわば社会を内側から腐らせるものになってしまった。これが日本の対米従属の、戦後の対米従属の誠に深刻な帰結であると私は思います。まさにこのような国民の精神状態に支えられて、安倍政権は持続をしてきた。

もちろん公には、いわゆる国体イデオロギーは昭和ファシズムの温床だとされて、民主化改革のターゲットとなったわけであって、したがって、それは廃絶されたっていうことになってるわけなんですよね。国体≒天皇制と考えられてきたわけですから、象徴天皇制が導入されて、国体ってものは無くなったんだと。だから、その証拠に死語になっているわけなんですよね。だけれども、じゃあ死語になったっていうことは、名実ともに廃止されたのか。そう言ってしまうと、これはつじつまが合わなくなってくるわけなんですね。といいますのは、これはもう現代史の謎と言ってよろしいかと思いますけれども、国体の護持というような観念、これによって、それがあの戦争にどれだけの影響を日本人にとって与えたかといえば、それはとてつもないわけです。なんであんなに戦争が長引いたのか。最後の１年間なんていうのは、もう一方的にやられるばかりでした。反撃能力はほとんど無くなって、一方的にたこ殴りに殴られ続けるという状態になっているわけです。日本人だけで300万以上の犠牲者ですけれども、そのうちの200万ぐらいが最後の１年間に集中しているわけなんですよね。東京大空襲や沖縄戦や原爆といったことがその中に含まれる。だから、もっと早くやめりゃよかったのにと、後代の私たちとしては当然思いますが、じゃあなんで早くやめられなかったのか。問題になったのは国体護持だったわけですね。つまり、もう負けるってさすがに当時の指導部だってわかっていたわけですが、なんとかして国体護持をしてという体裁を整えて負けるにはどうしたらいいだろうということで延々と迷っているうちに、膨大な犠牲者を出し続けた。けれども、最終的には本土決戦は回避された。そして、私たちは素朴に、本土決戦なんて本当にしなくてよかったというふうに思っています。確かに本土決戦なんてやったらとんでもないことになったことは間違いないわけなんですが、８月１４日までは「本土決戦、聖戦貫徹」だと国民に対しては言ってたわけですね。それを突然翻して、戦は終わりだと言い出したわけです。けれども、その理由だって、べつにこれ以上国民を苦しませるのは忍びないということじゃなくて、要するに、本土決戦をやると国体護持ができなくなるからという、その恐怖ですよね。それがあのタイミングでポツダム宣言を受諾した最大の動機だったわけです。だから、あんなに戦争が長引いた理由も、そして、あのタイミングで終わった、どちらの理由も国体護持であったということですね。

これほどまでに国体護持という観念は重大であった。そして、８月１５日の玉音放送で、その中で天皇は「朕ここに国体を護持し得て」というふうに言ってます。だから、国体は護持されたはずなんです。そして、戦後、この国体はいったいどうなったんだということは、国会でも問題になるわけです。野党議員が、新憲法を討議する議会の中で、「こんなに憲法が変わっちゃったら、これもう国の在り方が根本的に変わってると言わざるを得ないではないか。だからとてもじゃないけど国体が護持されてるとは言えないのではないか」と質問しています。こういう追求を受けて首相の吉田茂は、「いやいや、五箇条の御誓文を見たまえ。万機公論に決すべしと書いてある。あれはまさに民主主義ではないか。今度の新憲法は民主主義を強調している。国体はそもそも民主主義的なものだったから、したがって、今回の新憲法というのも大変国体の本質に沿ったものであって、だから国体は毫も変更されない」と、こう言ってるわけなんですよね。

だけれども、本当にそんなことあり得たのか。国体という言葉は国の根本的な在り方ということも意味しているわけです。国内的にはこういうことをいくら言って、通用したとしても、これを外国に向かって言ったらどうなりますかという問題があるわけですね。「全く変わってない」なんて、そんなの全く通りようがないわけですね。サンフランシスコ講和条約を結んで、一応日本の占領が終わることができたのはなぜかと言うに、それは国の在り方が根本的に変わったということを内外に宣言してるということですよね。「僕らはもうあの時の日本とは違います、違う国になりましたんで、また国際社会の仲間に入れてください」と宣言している。もしそうでなければ、国体が全く変わってないって言うんだったら、これをドイツに置き換えて言うなら、「われわれはナチス第三帝国から何も変わってない」と、こういうふうに戦後のドイツが言ってるっていうのと全く同じになりますから、そんなことはあり得ないわけですね。だから、明らかに、対外的には国体は根本的に変更されたと言ってるわけです。ところが、国内的には全く変わってないと言っている。じゃあ国体はいったいどこへ行っちゃったんであろうかというのが、いわば現代史の謎なのです。

ではその実態とはなんであったんだろうか。結局、それは、フルモデルチェンジによる再編で生き延びたということだったんではないか、と私は言ってるわけです。先ほども述べましたように、いってみれば天皇の地位にアメリカがくっつくんですね。「菊と星条旗」、これが結合しちゃうんですね。結合して、そして、長い時間を経て今起きていることは何かというと、いつのまにか星条旗の権威のほうが菊を上回るようになってきたなというのが現状だろうと思います。あれだけ天皇が、安倍政権に対して、要所要所で暗に批判をしているわけですよね。これは見る人が見れば、「天皇皇后両陛下はもう安倍政権が大嫌いなんだな」と。これは意識が高い人はみんな気付いてることですよね。ああいうかたちで批判を、ある種の叱責を受けても、安倍さんはカエルの面にしょんべんですよね。「そんなのどうでもええわい」と。いわゆる生前退位のことが出てきたときに何をやったかというと、それを検討する委員会、これも委員会の名前がすごい。公務の縮小に関する委員会と。天皇自身が公務の縮小では解決にならないと繰り返し言っているのに、公務の縮小に関する有識者委員会というのを作るわけですね。それで、その有識者委員会なるものに、日本会議の連中を次々連れてきて、そいつらに天皇批判をさせるわけですよね。

だから、こういう具合に、「もう天皇の権威なんて全く気にしてないよ」という態度を安倍さんはとっている。その安倍さんは、一方で、トランプ大統領に対してはまさに忠節を尽くすというかですね、ご機嫌取りですよね、ものすごく露骨で、卑屈な。とりわけ、トランプ氏が来日したときに、ゴルフ場で、すってんころりんしたときの映像はなかなか衝撃的なものがありました。あれを見ても、やっぱり一番驚くべきことは、安倍さんがそんな人だっていうのはもう今更驚きもしないんだけれども、日本人は怒らないってことですよね。安倍さんという人の政治姿勢がなんであれ、日本国の首相があんなふうに卑屈な態度をほかの国のトップに対して示すっていうことは、やっぱり「なんぼなんでも情けなくねえか」というふうにみんな思わないみたいなんだなっていうことです。でも、これがもし相手がトランプさんじゃなかったらどうでしょうか。トランプさん以外の人に対してああいう態度を取るわけがそもそもないのでありますけれども、あれが許されちゃうというのは、やっぱりアメリカの大統領だからでしょうね。「アメリカが相手だったらしょうがないかな」みたいな感じになってるわけですよね。

要するに、もう天皇を上回る権威性というのをアメリカという存在が持つに至っているというふうに思います。一番そのことを先鋭に表してるのが、いわゆるネトウヨの皆さんなんですよね。ネトウヨの皆さんは今上天皇のことが大嫌いですね。悪口ばかり言ってるわけです。彼らに言わせると、「今の天皇は反日左翼なんだ」と。左翼ってなんだろうと。たぶんそれは共産主義者とか共産主義者の末裔ってことになるわけですよね。共産主義者は、かつて天皇制の打倒ということを掲げて、いわば天皇に対して不倶戴天の敵として立ち上がったという歴史があるわけですね。だから、共産主義者というのは、古い言葉で言えば朝敵ということになるわけですよね。だから、こうやって意味連関を見ていくとどういうことになるかっていうと、「天皇は反日左翼だ」っていうのは、「天皇は朝敵だ」ということになるわけなんですよね。だけど、それは論理的にあり得ないだろうという話なんですが、しかし、彼らの発想の中ではあり得るのだとすれば、彼らの心の中に、この東京にいる天皇陛下とは違う本当の天皇がいるんだろうなとわかる。じゃあその彼らの心の中の本当の天皇っていうのは誰でしょうか。それはたぶんアメリカということになるのでしょう。今の右翼の連中は、なんのためらいもなく、街宣活動において星条旗を持ち出してきますし、それから、安倍さんがここまで偉そうな顔してるのも、やっぱりアメリカの代官だからでしょうね。あるいは、昭恵さんが面白いことを言ったよね。「私には私にしかできない、果たせない役割があると思うんです」と。それは何かというと、「私は天皇陛下からホームレスの人まで話すことができるんです」というのです。彼女としては善意なんだろうと思いますが、そう言うんですね。それってどういう意味であろうと。いうなれば、たぶん、天皇というのはこの日本社会の中で一番上の人、上の存在だと。ホームレスというのは、彼女の考えでは、この日本社会で一番最下層の人だと。だから、「一番下と一番上、全部私はつながれるんだ」って言ってるんですよね。一番上と一番下は一番遠いですね。この一番遠い存在っていうのが、昭恵さんを媒介にして、「みんなつながる」って言ってる。これって、「自分は国民の統合を作り出せる」と言ってるに等しいんですよね。だから、僕はこの発言聞いたとき、相変わらず無邪気に言ってるんだろうなとも思いましたけど、一方で、「この人いったい何さまのつもりや」と思いましたよね。アメリカが本当の天皇として存在して、それの代官ということで安倍晋三が偉そうな顔をしてて、それの女房であるということで、なんか自分がいつのまにか皇后陛下かなんかのつもりになっちゃったらしい。「自分を通して国民統合ができるんだ」ってなことを口走っちゃってる。

本当に気持ち悪い世の中になりましたということなんですが、たぶんその気持ち悪い世の中の原点というのがこのシーン（昭和天皇とマッカーサーの記念写真）にあるんですよね。そして、日本はべつに属国なんかじゃないと、アメリカとの関係っていうのは特別なんだと、従属とか支配とかそういう政治的な関係じゃないんだというイメージ、世界像をつくったのは、この天皇とマッカーサー、あの会見、あの時の、いわば伝説に私は由来すると思ってます。

これについては詳しいことは『国体論』の中に書きましたので、お読みいただければと思いますけれども、要するに、マッカーサーが昭和天皇の態度に感動したっていう話ですね。本当にそんなことあったのかどうかっていうのよくわからないんです。仮にあったとして、いってみれば、これは戦後日本人が、アメリカ、鬼畜米英とか言ってたあのアメリカ、たくさんの焼夷弾を落とし、核兵器も落としたアメリカに対して、これにひっついていっていいんだという、いわばアリバイを作ったと言えると思います。なぜなら、アメリカを代表する人物としてのマッカーサーが、日本の本当の心、それは昭和天皇によって象徴されるわけですが、その本当の心を理解し、それに対して敬愛の念を持ったのだから、私たちはアメリカと抱擁をしていいんだと。あるいは、アメリカから抱擁されたいと、こういうことになっていったんだろうと思います。

もちろん、これは全く日本の片思いであって、だいたいリチャード・アーミテージあたりがはっきり言ってるわけですよ。「私は米国を愛するが故に日米同盟の仕事を喜んでやってきた。多くの日本の友人がいるが、日本を愛するが故に私が何かをすることはない。何が米国の国益かを私は知っている」。これ、アメリカの政治家として実に普通のことを言ってるだけですよね。逆に、アーミテージ氏が、「私は日本が大好きだから、時にアメリカの国益を損なっても日本のためにいろいろしてあげてるんですよ」なんてことは言うわけがないし、もちろんそんなことしない。もし本当にそんなことをしたら、アーミテージは売国奴だということにアメリカでなるわけですから、そんなことは当然しない。ところが、アーミテージが何かを言ったりしたりすると、日本でどういう報道されるのかというと、「あの親日派のアーミテージさんが日本のためを思ってなんかやってくれてる」と。要するに、これはもう政・官・財・学・メディアのメインストリームが、みんなでよってたかって、アメリカは日本を愛してくれてるんだという温情主義の妄想、これを一生懸命維持するために力を尽くしてきたということだし、それは要するに、一つの巨大な利権共同体なんですよね。そのフィクションを共有し、維持することによって、そこに巨大な利権がかかってますから、そこに貢献した人間に対してはさまざまな地位や権益が割り振られることになるし、それを乱すような言動をする人間っていうのは徹底的に排除される。

私が属する政治学の分野なんかでいうと、国際政治学なんていう分野は、分野自体がだいたいアメリカの出先機関みたいな分野です。だいたい９割方の人間は、もう安保マフィアなわけですよね。だから、こういうのは具体名を挙げて言わないと面白くないから具体名を挙げて言いますが、たとえば、藤原帰一さん。彼なんか、ブッシュ大統領の頃なんか「デモクラシーの帝国」なんて言っちゃって、「アメリカはおかしいことやってるぞ」と、随分アメリカ批判をやってたわけです。ああいうのだけ見ると、「この分野にも随分アメリカ批判で踏み込んだことを言う人もいるじゃないか」なんて思われるかもしれませんけれども、じゃあ近年はどうですか。安倍政権がこれだけ対米従属姿勢強めていく中で、じゃあそれを批判してるか。例えば新安保法制についてものを言ってるかと。なんにも言ってないですよ。当たり障りのないことか、政権を後押しすることを言っている。そこで彼の本質がわかるわけです。この人は結局、ああだこうだ言っても安保マフィアなんだなということだし、それから、あるいは、かつてやってた批判というのも、その本質が見えてくる。いろいろラジカルに批判してるように見えて、これは決して一線を越えないような種類の批判だったんだなということもよくわかるわけです。

あるいは、これは安保マフィア共同体の全体の利害から考えますと、ちょっとやんちゃに見えるやつぐらい入れといたほうがいいんですね。マフィア共同体の信憑性が上がるから。そうしないと、まるでその共同体は、批判性を欠いた御用団体ではないかのように見えますからね。だから、ちょっとやんちゃなこと言うやつも入れといたほうがいい。だけれども、そのやんちゃを言うやつも、さてここが決定的な点だねっていうところになると、まあ見事にこれは沈黙しますよってことだし、その藤原さんの弟子が今大変活躍してらっしゃる三浦瑠璃さんですね。あの人もなんかいろいろ言ってますけれども、あれは何なんでしょうね。彼女の配偶者は外交官らしいですけれどね。東大農学部を卒業されて、それから東大の大学院へ行ってるんですね。農学部出身だったのに、なぜ国際政治へ転じたのか。よくわかりません。そして、アメリカに行って、岩波書店から本を出して、やたらにメディアで活躍するようになった。その間、外務官僚の人と結婚してると。うーん、ということですよ。彼女のいろんな安全保障等々についての発言を見ると、決して踏み外さないんですね。ここに踏み込んでしまうと安保マフィア共同体にダメージを与えることになる、というようなことは絶対に言わないんですね。

こういう具合に世の中はできているというわけでありますが、さて、単に戦後日本の対米従属と戦前天皇制の類似性っていうことを言うだけでは、あんまり説得力がない、面白くもない。ですので、『国体論』では、いかにそれが歴史的に平行するような歩みをたどってきたのかということを論じています。歴史が反復をしているのです。どういうことかというと、日本の近代史は、１９４５年というところで大きな断絶というか、マラソンでいえば折り返し地点みたいなものとして、前半と後半というふうにはっきりと分かたれるというように、普通、認識されていると思います。その中で、明治維新の１８６８年から１９４５年までが前半、そして、１９４５年から現在までが後半っていうことになってくるわけなんですよね。それぞれで、いわば国体が形成され、そして、国体によってある側面では発展をし、そして、その結果ある意味いったんそれなりに安定するといいましょうか、安定の結果、国体が見えなくなる時期が訪れる。じゃあそこで、発展のために、ある時期、ある意味では必要とされた国体というものを克服できればよかったんだけれども、ところがそうならずにその国体の病理が現れてきて、国体が崩壊へと向かっていく、という３つのピリオドに、それぞれ戦前も戦後も整理できるんではないか。そして、それが、言ってみれば平行をなしている。

どういうことか。戦前の場合、明治期に、紆余曲折ありながら、いろんな混乱もありながら、天皇中心の国造りがなされていくわけですね。これは国体の形成期です。形成期は同時に発展期でもあって、この時期の日本というのは、封建社会だったのが一気に一等国、つまりは植民地を持つ帝国主義国家へと成長をするわけですよね。そうやって、ある意味、国家的目標というのが達成をされますと、一種の緩みが生じてきますよね。「こんなに頑張ってきたから、ちょっと休んでもいいんじゃないか」ということになって、自由化の機運が出てくる。それが大正デモクラシーの時代ですね。そこで一定の自由主義化や民主主義化がされるわけです。天皇の影は薄くなる。そこには大正天皇のキャラクターという偶然的要素もあったわけですけれども、いってみれば、明治が「天皇の国民」の時代だったとすれば、大正は「天皇無き国民」の時代だと。それならそこから自由民主主義がさらに発展すればよかったのに、そうはならずに、昭和前期になるとファシズムの時代になってしまう。それは国体の崩壊期です。最終的には破滅的な戦争で国体がぶち壊れるというところへいくわけです。その際に、面白いですね。「天皇の国民」が「天皇無き国民」になった後、最初のものが弁証法的にひっくり返って「国民の天皇」、これは北一輝が考え出したものですが、こういう観念が出てくる。でも、結局、それは一個の不条理にすぎず、時代は破滅へと向かっていく。これが戦前の国体の歴史でした。

戦後の歴史の国体、戦後の国体の歴史も、そっくりの軌道をたどっている。どういうことか。要するに、戦前の「天皇」の項目に、「アメリカ」が代入されるわけなんです。敗戦、占領の時期から、だいたい１９７０年前後ぐらいまでというのは、戦後の国体、対米従属の国体が形成されていった時期である。形成期というものは、やはり明治と同じく混乱期でもあるんですよね。ほかにさまざまな可能性があったわけで、そうであるからこそ混乱するわけです。でも、その混乱を、支配側はついには乗り切ることに成功して、安定をさせていくわけなんですね。この時期は占領期から始まるのですから、まさにアメリカの日本として出発してるわけですね。そして、明治期が発展の時代だったのに似て、焼け跡、焦土から復興、ついにはもう一気に、経済大国という地位をうかがうところまで発展をしていくわけです。その次の時代、１９７０年前後から１９９０年前後、これは、日本が、言ってみれば再び一等国化した時代から、東西対立の終焉の時期までということになりますが、この時期は、それこそ「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とまでもてはやされたぐらいで、「アメリカ、何するものぞ」という感覚になるわけですね。アメリカの属国であるということのリアリティーが蒸発する時代になるわけです。だから、いうなれば、「アメリカ無き日本」ということになる。その意味で、大正時代、天皇の姿が見えなくなるっていうことと近いものを感じるわけです。

そこで対米自立できるだけの体力を蓄えたはずなので、そこで対米自立に踏み出せばよかったじゃないかと、今になっては思うわけなんですが、しかしそれができず、１９９０年前後から現在に至るまで、つまりそれって平成時代ほぼ丸ごとなんですけれども、これが昭和ファシズム期と並行する国体の崩壊の時代になっています。1990年以降、アメリカの子分をやってる理由が無くなったわけですね。逆にアメリカから見れば、日本を庇護する理由が無くなった。ゆえに今度は、庇護から収奪へと転じてくるわけですね。これはアメリカの国益ということから考えれば当然のことです。アメリカからすれば、「大事に育ててきた子豚が丸々と太ってきた、さておいしくいただこう」と、こういうことになってくるわけですよね。本来ならば、当然日本側はそれに対して抵抗しなければならない。にもかかわらず、この10年20年、まああるいは30年ぐらいになるかもしれませんが、日本のエリートがどういう思考回路になってきたのかというと、日本国民が蓄積してきたいろんな有形無形の富を、多国籍資本、これに売り払うことによって自分の地位や権益を保つ、こういうのを普通、買弁とか売国って言いますけれども、こういう行動様式、さらには、あたかもそれが最も正しいことであるかのような思考様式、これがまん延をしてきたということですね。対米従属をする理由というのが無くなった時期にもかかわらず、ますますそれが強まるという、必然性が無くなったからこそ強まるということになっていったわけです。これが社会を荒廃させてきた。だから平成時代全部が、戦後の国体の崩壊期なのです。面白いことに、戦前の国体の寿命、明治維新から敗戦までで77年間、他方、戦後の国体の歴史は、２０２２年になりますと敗戦から77年間ということになるので、ちょうど時間量的に同じになります。戦後も長くなったものですね。

こういう具合に考えてみますと、なんで安倍政権がこんなひどいのかについても、非常に腑に落ちてご納得いただけるんではないかと思います。要するに、東條英機政権みたいなもんじゃないかということですよね。もうサイパン陥落はいつなんだっていう気分になってくるわけですけれども、こんな統計不正とかね、サイパン陥落みたいなもんじゃないかと思いますが。だって、統計不正も本当これ「やってる感」の必然的帰結です。そもそもアベノミクス自体がやってる感を本質とする経済政策でした。「デフレからの脱却」っていうキャッチフレーズそのものが私は非常に倒錯してると思いますけれども、貨幣現象としてのデフレーション、これをインフレに転じさせること、それから、株高を演出すること、これによって景気がよくなっているような気がしてくるはずだと。それで、みんなが景気がよくなってくるような気がしてくるとカネを使い出すと。そうすると、本当に景気がよくなるという、人々の気分というものに非常に依存した政策ですよね。それこそやってる感を出していれば現実がついて来るはずだというものだったのだけど、これがどうも、結局うまくいかなったと。うまくいかなかったとなると、最終的にじゃあどんな手段が残ってるかというと、もう数字をいじってしまえ、と。これまた、東芝の不正会計事件とそっくりですよね。東芝では、あれはもう「創造的に数字を作れ」と、「創造的会計」とか言ってたわけですからね。今回は、これ、「国家の統計数字を創造的にやればいいじゃないか、クリエイティブにやろうぜ」ってことですね。こういう感じになってきたわけです。だから、まさにこの国体の崩壊期にふさわしい政権として安倍政権はやってきている。

今日は憲法学習会だろうと思いますので、憲法の問題にも触れておきたいと思います。国体の構造を考えたときに、戦前国体に関して、今読んでも卓見だなという古典的な分析になっているのが、久野収と鶴見俊輔の『現代日本の思想』という本ですね。その中で、明治憲法体制っていうのは二重性があったんだと。明治憲法には顕教的部分と密教的部分があったんだと。こういう分析をしてるわけなんですね。どういうことかというと、大衆向けには顕教なんですよね。天皇とは何か。「それはね、神様だよ」と。だから、「この国で起こることの全部は天皇陛下がお決めになるんだ、親政だ」と。だから、神聖皇帝的存在としての天皇ですね。大衆向けにはわかりやすくこういうことを言っているわけです。だけれども、実はパラドックスがあるわけですよね。いやしくも憲法というものを作る限りは、憲法の本質っていうのは権力への制約にあるわけですから、天皇が何やってもいいんだというんだったら憲法なんかいらないわけなんですよね。なので、一方では、どうしても明治憲法は立憲君主制の性格をはらまざるを得ないわけです。だから、エリート向けにはどういう説明をしていたかというと、「天皇は立憲君主なんだ」と。それが学説的には天皇機関説ということになるわけですよね。天皇機関説は、これ、大衆向けにはややこしくてよくわからないわけですよね。なので、「天皇は神様だ」という話に顕教の部分ではしていくと。だから、こういうある種の使い分け、二重性でもってレジームが動いていたと久野・鶴見はいうんですが、しかし、これが昭和期に入って、大恐慌等々、社会全体が極めて難しい状態になってきたときに、この二重性がもううまく機能しなくなってくると。

そのなかで、天皇主権説が天皇機関説を打ち倒していくわけだけれども、これはある意味、大衆のエリートに対する復讐であったとも言えるわけですよね。人々を貧困の中に突き落とし、飢えるに任せていたエリートたち、これに対する怒り、これが、軍部の野心と右翼のあおり等々と結合することによって「天皇機関説は不敬だ」という圧倒的な空気となって、天皇主権説が一気にのしていくということになった。なので、昭和ファシズム体制というのは、顕教による密教の飲み込みだったと、こういうふうに久野・鶴見は言っていますね。

では、戦後もやはり国体なるものが、戦前とは違うかたちで、しかし、日米関係のなかにしっかりと再建されたんだというふうに見るならば、やはり同じような二重性があるんじゃないか。それは平和憲法と日米安保体制ということの二重性だと思います。つまり、建前、すなわち顕教ですね、建前の部分では「日本はどんな国ですか」というと、「９条を持つ平和国家なんだ」と。しかし、他方で、もう一つの顔があるわけなんですね。それは本音の部分ともいえましょうし、密教の部分とも言えるわけなんですが、アメリカの軍事的世界戦略に奉仕する同盟者であるという一面ですよね。アメリカと軍事的な関係、協力関係を持っているというときに、そのときのパートナーシップっていうのは普通ではないんですよね。普通ではないというのは、アメリカが普通の国じゃないっていうことですよね。第二次大戦が終わって以降も、ほぼ常に世界のどこかで大中小の戦争を、間断なくし続けてきた国がアメリカという国である。そんな国はほかにない。そして、そのアメリカの戦争行為のためにこれだけ好条件で大規模な米軍基地を日本は提供している。このことを抜きにして、アメリカは世界的軍事戦略をとることはできなかったし、現在でもそうですよね。まさにアメリカにとって不可欠の軍事的要石を日本は提供している。だから、アメリカの戦争において貢献するところ大の存在であると。ここに非常に鋭い矛盾があるわけです。「平和国家だ」と言いながら、アメリカがさまざまなところでやる人殺し行為の大変重要な協力者として、それを手伝っているということです。この矛盾が、やっぱり今、圧し隠せなくなってきてるよということなんだろうと思うんですね。集団的自衛権行使容認という出来事、あれはいったい何だったのか。これまでも、米日の軍事力をもっとより一体的に運用したいという要求というのは、アメリカの側からずっとあったし、そして、日本の側にもそれに応えたいという勢力があった。しかしながら、当然これはいろいろ反発も強いことだから、一気呵成に進むということではなかった。そこで、安倍政権のイニシアチブによって、これを劇的に質量共に進めていこうという、そういうことだと思います。建前と本音、本音が建前を飲み込みつつあるということですよね。だから、戦前の国体の崩壊過程では、顕教のほうが密教を飲み込んでいきましたけれども、戦後70年たって起きていることは、それの逆ということなのかもしれません。

なぜこのような尋常ならざる矛盾を抱え込んでしまったのかというと、その矛盾の起源はやはりこれは戦争敗戦直後にあるわけだと思うんですね。敗戦の時、天皇制を存続させるということ、昭和天皇はもうそのことしか考えてなかったわけですね。昭和天皇はある意味では政治的に明敏な人物だなと、さまざまな研究を読むと思います。何が明敏か、それまでですよ、散々いけいけどんどんで戦争をやっていた超軍国主義国家だったのに、すぱっとそれを方向転換して、「これからはもう平和国家だ」と、「これでやっていくしかないんだ」というところに見事に切り替えてるんですよね。それしか道はないと、正確に見抜いていた。それは日本国家そのものの存続にしてもそうですし、それから、自分自身の生き残り、あるいは、皇族、天皇制というものの生き残りです。たぶん日本国家そのものが生き延びるということと天皇制が続くっていうことが、昭和天皇においては全く同じこととして捉えられてるでしょうから、皇統を断絶させてはならぬというのは皇族の倫理であり、至上価値なわけですね。このとき、本当に大ピンチだったわけですね。下手すれば戦争犯罪人として裁かれかねない。「天皇なんていうものはもう無しにしよう」ということになりかねない。そのような極めて危険な状況の中で生き延びるためには、これはもう一気に平和主義へと転じるしかないんだということを極めて明敏に察知していた。

アメリカの側も、天皇の権威の力、これは日本人をコントロールする上で使えるだろうという意見にまとまる。これはアメリカからすれば極めて現実的な判断です。いつまでも日本人が占領下で抵抗してくるというようなことだと非常に困る。アメリカ軍の犠牲者がさらに出るというようなことになる。ところが、いざ占領が始まると、全然抵抗がない。なんでこんなに抵抗がないんだろうと。それはあの玉音放送の効果だと。その前から、天皇はうまく使うべきであるというふうにアメリカの内部では検討されていたわけですけれども、マッカーサーとしてはそのような占領下の現実を見て、これはもう「使うしかない」という決心を固めるわけですね。そして、使うときに、じゃあいったいイデオロギー的にはどういうものを天皇に担ってもらうかというと、これはもう平和主義でいくしかないということになる。

だから、天皇が生き残るために、一方では平和主義を旗印にする必要があった。それは憲法９条がなぜできたのかということにもつながっていくわけですね。あの憲法９条の草案がアメリカ側から日本側に示されたとき、日本の統治エリートたち、幣原とか吉田は驚愕したと言われますね。「戦力不保持になるとは困ったな、どうしたもんだろか」と思うわけですが、最終的に、昭和天皇が「それでいいじゃないか」というふうに言うわけですね。これは、昭和天皇が世界的に自分たちがどう見られているのかということも意識しながら、非常に明敏な判断であったということです。

ところが、ここに矛盾が生ずる。というのは、他方でいよいよ東西対立が激しくなっていく中、そして、共産主義の脅威が中国革命や朝鮮戦争等で具体的なかたちをとってくる中で、天皇としては、丸腰であってはとてもじゃないけど体制を守れないじゃないか、ということになる。自分たちの戦力は持てないのだから、米軍が必要だと。米軍が駐留し続けることが、サンフランシスコ講和条約後も必要だということになってくるわけです。つまり、安保体制を要求するということですね。つまり、絶対平和の丸腰国家ということと、アメリカがやる戦争への大変忠実な協力者ということ、この矛盾する二つの側面は、天皇制の存続のためにはどちらもどうしても必要だったということですよね。

この矛盾をなんとか覆い隠すために呼び出されたものがなんであったかというと、軍隊でない軍隊という自衛隊と、それから、沖縄ですよね。ここに米軍の大部分を集めてしまうことによって、この米軍駐留という事実をできるだけ見えなくさせてしまう。私は、神奈川県で長く生活しました。神奈川県て沖縄の次に多いんですよね、米軍基地が。私の身近にも米軍住宅がありました。それから、横須賀の艦載機が厚木の飛行場へ飛ぶ訓練をやってる、その騒音というのは結構ありました。そういうことを子どもの頃から見聞きしているというのは、何ほどかの意味をひょっとすると持ってるのかもしれないと思います。なんだかんだいって、結局、沖縄の次に米軍基地多いのは首都圏です。それは、いざとなったら米軍は首都を制圧できますねということを意味しているわけですね。これ関西移ってみますと、関西には全然米軍基地が無いわけですよね。だから、たぶん関西の人間は、ずっとそこで暮らしている限りは、米軍基地が日本にはあること、そして、それはもうある意味、決定的な場所にあるんだということについて、生活実感としてそのことを意識するようなことは、全然ないかもしれないですね。だから、その意味でも、これは沖縄に全部封じ込めちゃうっていうのは、この矛盾を極めて強力に隠蔽することに役立ってきたのだと思いますね。

しかしいま、この矛盾がもうどうしようもなく隠せなくなっています。というのは、結局、今、本音が建前を飲み尽くしている。もう平和国家という言葉に限界が来ている。そもそも、平和国家というのは何なのでしょう。僕はやっぱり思うんですよね、国家って基本的に戦争するものであると。そして、戦争する一方で、「自分たちは軍国主義国家だ」などと堂々と名乗る国は一つも無いわけですね。どこもあくまで「自分たちは平和愛好者である」と言いながら戦争をする、というのが国家の本質である。そして、これだけアメリカの戦争の手伝いをしながら、平和国家とか本当に言ってていいんだろうかっていうのが、私は非常に強く最近感じることであります。

結局、そのような現実の中で、日本の戦後の平和主義はどんどん空洞化してきたと思います。その空洞化が如実に表れたのが北朝鮮問題、朝鮮半島核ミサイル危機です。これを巡って、それが濃厚に表れたと思います。日本政府はどんな振る舞いをしたでしょうか。まず、トランプ大統領が「すべてのカードはテーブル上にあるぞ」と、こういうことを言った。先制武力行使も辞さずということですよね。それに対して日本の安倍さんはなんて言ったか。「100パーセント共にある、もっと圧力を」。それから、ほかの外国に対しては、「北朝鮮と断交せよ」と。外務大臣なども、こういうことをわめいて回ったわけですね。トランプさんが国連総会で、「コンプリート・ディストラクション、完全なる破壊もありうる」というようなことを言って、それに対して世界中が驚愕したわけですね。「なんという物騒なことを言うんだ、いくらなんでもひどいぞ」と。そのときに、日本の安倍晋三がただ一人、「完全に支持する」、とこう言ったわけですよね。

そして、例の米朝首脳直接会談以降、劇的な展開の最中にある。もちろん、まだいろいろ困難はありましょう。けれども、今度ベトナムで会合をするということで、朝鮮戦争の終わりが本当に見えてきつつありますよね。米韓中朝が対話で解決しようと、そして、朝鮮戦争を本当に終わらせようと、こういう方向へいっている。そういった文脈において、日本だけが、「安易な対話に反対」と言っている。「核・ミサイル・拉致の包括的解決を」とも言ってます。確かに、核問題、ミサイル問題、拉致問題のすべてを包括的に解決するのが望ましいというのは、その通りだと思います。だけれども、包括的解決をと言うんだったら、核兵器開発のこともミサイル開発も、それから、拉致問題というとんでもない行動も、これ全部やはり朝鮮戦争が休戦状態のままずっと続いてるという、この異様な状態の中で生まれたものであるわけで、だから、これらを包括的に解決するというんだったら、朝鮮戦争を終結すると、そこが問題の解決の糸口と言いましょうか、元を断つことであるはずです。だから、本来、この間の危機において、日本の政府当局はどんなメッセージを出すべきだったかといえば、「朝鮮戦争の終結に向けて日本外交は努力をしていく」と、こういう態度を見せるべきだと思います。ところが、朝鮮戦争を終結させるための努力をするなんていう態度はただの一度も見せたことがないですね。逆に、あれだけミサイル騒ぎをあおって、そして、トランプさんが物騒なことを言うと、「やれ、やれ、もっと圧力だ」と言いまくってきた。要するに、そこに透けて見えた態度って何かといったら、「朝鮮戦争が終わっちゃうぐらいだったら、また始まってくんねえかな」っていうことですよね。再開してくれたらいいのにということですよね。

そうなったらもちろん、日本にも実体的被害が及ぶわけなんですよね。ひょっとするとそれは核ミサイルによるものかもしれない。その場合、犠牲者数っていうのはなんぼになるんだと、何十万人となるかもしれないと言われています。まあ計算できない。どのぐらいの精度で飛ばせるのかよくわからない。さすがに、東京に水爆を落とされるとなると、安倍晋三もこれは自分も死ぬかもしれないと思って真っ青になるかもしれません。けれども、たぶん彼の頭の中ではそこまでひどいことにはならんと思ってるんでしょうね。何発か通常兵器のミサイルでも飛んできて、何百か人が死ぬというぐらいだったら、「それだったらこれ都合がいいじゃん」という考えなんでしょう。これ、「憲法９条のせいで日本は必要な措置がとれず、こういう犠牲が出たんだ。だから、この犠牲に対して責任があるのは護憲派だ」と言って、護憲派の人々を弾圧する口実にすればいいわけですから、全然問題なしと。たぶんこれは、政権の本音だと思いますね。

こういう状況になってきたのも、ある意味、歴史的経緯を考えれば当然といえば当然なのかもしれない。結局、戦後日本の民主主義化がある一定以上のところへ進まず、逆コース政策へと転じて、旧支配層、つまり元ファシストとアメリカが結合する権力支配層が生まれていった。それが「戦後の国体」とか、私が「永続敗戦レジーム」というふうに呼ぶ体制の骨格でありますけれども、それが今日に至るまでずっと続いてるわけです。それが形成されていったきっかけは何かっていったら朝鮮戦争なんですよね。だから、いってみれば、戦後の国体とか、永続敗戦レジームと私が呼ぶものは、朝鮮戦争レジームと言ってもいいのかもしれません。だから、その観点から見れば、朝鮮戦争が終わってしまうというのは彼らにとって誠に不都合なことですよね。なんとかしてこれは続いてもらわなきゃ困るということでしょう。だから、「終わるぐらいだったら、いっそ再開してくれ」と、こういう反応になるのだろうと。このような、いわば権力の本音というものを見せつけられても、いまだに目が覚めないのが、このおめでたき人々、日本人ということですよね。朝鮮半島の非核化ということ、これについてだって、今、世論がどういう反応をしてるのか。非核化といったときに、たぶん多くの日本人が考えてるのは、それは一方的に北朝鮮が核武装をやめるということだと思ってる。アメリカの側はもちろん核兵器をずっと持ってるわけですから。それで、そのアメリカと日本は同盟国である。だから、非核化といったときに望んでいることは何かというと、向こうは核兵器を絶対使えないというか、持ってないけれども、こっちは使おうと思ったらいつでも使えるんだよと。こういう一方的に優位な状態ですよね。こういう状態でのみ日本は平和主義なんだとかなんとか言えるというわけですよね。しょせんはこういった自分は絶対やられないけど、相手をいつでもやっつけることができるというような状態、そこに安住するということが、日本の現在の平和主義の内実になってしまっている。こういう悲惨な状態にあると思います。

そういう中で、天皇自身の決断によって平成が終わろうとしています。これは非常に興味深いことだと思います。今まさに国体の崩壊期、国のかたちというのが全面的に壊れて、そして、変わらざるを得ないという状況になってきている。そういう中で、天皇が異例の発言をして、「辞める、俺は辞めたいんだ」と、端的に言うとそう言って、平成時代に幕が引かれることになった。そして、先ほども述べましたように、天皇皇后と政権のことあるごとの反目の表面化、これがおことばの発表を巡って、頂点に達してきたと思います。これは非常に面白いことになってきたとも言えるのです。どういうことかというと、基本的に天皇制とは何かというと、権威と権力を分割するシステムであるわけです。天皇というのは最高権威だけれども、権力は持たない、実力的には無力であると。逆に、権力のほうは、いわゆる天下人ですね。これは最高実力者だけれど、天皇を排して自分が権威も兼ねてしまおうというふうにはしないと。征夷大将軍とか関白とか、朝廷に与えられた地位でもって、その最高位に就いて、それで良しとする。

世の中が、うまくいってる時代は、権威と権力が協力的な関係にあるわけなんですね。権威と権力が良好な関係にあって統治している。たとえば、この左側の写真、これ佐藤内閣の時代です。１９７０年代ぐらいになるんですけれども、左から佐藤栄作、それから、こっち側を向いてる真ん中の人物が昭和天皇、右側の背中が見えるのが吉田茂です。この写真、ちょっと解像度が悪いんで見にくいかと思いますが、昭和天皇がものすごくいい笑顔をしてるんですね。破顔一笑という感じでですね。もうこの表情には、佐藤とか吉田といった、戦後の親米保守指導者に対する昭和天皇の深い信頼感が表れているし、まさにこのような面々と一緒に、昭和天皇は自らも対米従属レジームをつくることに尽力もしたわけなんですね。そして、そのレジームは一面では大きな成功をした。すなわち、焦土からの復活という点では成功を収めた。いわば、自分たちが意見を一致させて調和してやってきた事柄がうまくいってるんだという、その実感がこの昭和天皇の明るい表情に表れてるように思います。だから、この写真は、うまくいってるときの典型的な権威と権力の関係を示している。それに対して右側。これはなんかこう、剣呑な目つきを天皇がしているというものですけれども、こういう具合に、日本の歴史において、世の中が平和なときは権威と権力がうまくいってるけれども、世の中が混乱し不穏になりというときには、この権威と権力の関係が反目をする、場合によっては対立をする、場合によっては闘争的な関係になる。こういったことが日本史において何度かありました。そして、それを通じて大きな転換が行われる。

ですから、私は今、ああいった異例のかたちで、お言葉などが出てきたことそのものが、まさにこれは国難の時代を象徴してるんだなと思いましたし、同時に、これでようやっと国体なるものにけりをつけるチャンス、機運、それのための好機というものが、今、巡ってきたんじゃないかというふうに思います。もちろん、ずっと話してきた通り政治の世界も悲惨な状況ですし、こんな状態を許してきたというか、選び続けてきた国民精神の状態というのも悲惨なものです。しかし、どこかで必ず反転は来ます。私たちはその日に備えて、しっかりとした準備を、知識を高めることによって、また、それを他者に伝えることによって、やっていかなくちゃいけないんじゃないかと思います。本日はどうもご清聴ありがとうございました。

02:00:33

◆立石

白井先生、長時間の御講演ありがとうございました。本日のお話を通じて、この日本の主権の実態などがよくわかりました。本当にありがとうございました。時間も時間なんですがどなたかご質問はありますか。

◆質問者

私は川越の弁護士です。大変面白く貴重な講演をありがとうございました。現在は、この戦後レジーム、敗戦後レジームの崩壊期にあるっていうことなんですが、先生が考える崩壊のシナリオみたいなものって何か頭の中にあるのでしょうか。第二次大戦のときはああいう悲惨な敗戦で崩壊に至ったわけですが、今の対米従属の崩壊のシナリオなどを考えていらっしゃるのであればお教えください。

◆白井聡

難しいですね。それはいろんな要素があるんで、なんとも断言しかねるところです。たとえば、経済危機ですね。もうこれだけ大規模金融緩和をやっていて、「大丈夫なのか、これはいつか爆発するんじゃないのか」というのはずっと言われてます。そうなったら、もう財産税だの預金封鎖だのやるしかないんですよね。そういうことによって、こういう政府だったのだということが、どんな人間にもわかるようになる。むちゃくちゃをやって、それでもうにっちもさっちもいかなくなったら、国民がそれまで積み上げてきた財産を全部召し上げる。それではじめて目が覚めるのか。

あるいは、戦争ですよね。東アジアの情勢は予断を許さないですよね。朝鮮戦争の問題は解決しそうだ。そうすると、もうすでに今その兆候が表れてるんですけれども、日韓関係はよくなるどころか、もっと悪くなりますよね。それから、朝鮮戦争が終結して、在韓米軍撤退という可能性がリアルに出てきたわけです。そうなると今度は、次の問題の焦点はどこへいくかというと、台湾問題になってくるんですよね。台湾どうするんだという話になってきて、これも中国の出方は近年非常に強硬になってきている。結局、ここのところにアメリカは踏みとどまるのか踏みとどまらないのかということが焦点になってくる。根本的には、さらにその背景をなすものとして米中の対立がありますから、これどう転んでもむちゃくちゃ難しいんですよ。そして日本は地理的に米中のあいだにありますんで、生き延びるためには大変な知恵を必要とする場所に置かれているんですよね。にもかかわらず、こんなにアホですというかとんでもない状態にあるんですよね。これ、むちゃくちゃ賢くてしっかりしてても、「これは難しいわ」という局面なのに、その状態においてほとんど意識不明みたいな状態でいるわけですから、どんなことになっても私はおかしくないというふうに見てますね。

◆立石

どうもありがとうございました。白井先生にもういちど拍手をお願いします。